

氏名（本籍）	ヤマ	サキ	アキ	ト	山崎秋人（島根県）
学位の種類	博士（美術）				
学位記番号	博美第108号				
学位授与年月日	平成15年3月25日				
学位論文等題目	作品 複合する平面と空間（取り囲む敷地と白樫） 論文 作品 - 仮想体験をもたらす鏡				
論文等審査委員					
（主査）	東京芸術大学	助教授	（美術学部）	坂田	哲也
（論文第1副査）	”	”	（ ” ）	井村	彰
（作品第1副査）	”	教授	（ ” ）	中西	夏之
（副査）	”	”	（ ” ）	野田	哲也
（ ” ）	”	”	（ ” ）	佐藤	一郎

（論文内容の要旨）

第一部 美術作品によって現象化し、体験されるイメージ

一般的な作品を、イメージと媒体（現象化される際の技法、技術）に分けて捕らえ、各媒体によってどのように仮想内容の体験が変わり、その違いが作風の表現にどのような変化をもたらしたかを記述した。

1．情報としての作品 体験としての作品

写真、映像媒体によって作品は実物以外によっても鑑賞され、それが作品を鑑賞した経験として記憶されるが、‘実作品の鑑賞’と言う体験は視覚以外の体感という感覚も導入される。そして近年の作品には、写真媒体による視覚体験に集約できない形の作品表現が強く意識されて作られている。それらは、作品の巨大化、物質感の表出、臨場感の導入、肉体的行為の軌跡への意識などである。

2．仮想体験について

美術作品は実体験に変わる体験 - 仮想体験を与えるものとして生まれた。その内容は不可視であった神を表わす宗教から、個人の世界観の表現に、時代とともに変化した。しかし、個人の表現によって作られる内容は、宗教のような共通項が少ないために、鑑賞者はその内容が何を表現しているのかを把握するための理解能力が必要になった。

3．絵画とその周辺について

絵画は、美術という個人の表現の場としての環境を形成したが、現在その中では、個人の独

自的表現が重要視されている。しかし、作品と鑑賞者の間では、環境としての美術界は予備的な知識に入るものである。したがって、独自の表現に対する理解能力も個人差の影響を免れない。その理解能力は鑑賞者に作品を受けとめる窓口を提供するが、作品によって得られる感動や感情などの心的反応は、そういった窓口を過ぎた上でのことであり、窓口である理解能力とは直接的な関係はない。よってそういった理解能力に影響を受けるとしても、イメージを映し出す鏡である絵画は、個人差の網を抜けて心的反応を及ぼすことが十分可能だと考えられる。なぜならば作り手側として主観の实在をイメージの具現化を通じ確認するとともに、二次元というものが主観と客観の間を漂うもので、その中間的状态が限りなくイメージの知覚に近いからである。

第二部 仮象（仮想）空間の創出を目的とした自作の展開

第二章では、自分の作品が、現実空間の中に仮想空間（仮象空間）を創り出すことを目的にして制作されていったことに触れた。そのために、仮想性を再現する形式も、想定するイメージによって変化したため、作品は絵画や、壁画、そしてパフォーマンスなどの形式によって表現された。よって具現化されるイメージがどのように変化して、どういう経緯でそのような作品となったのかなどを、各作品を通して記述した。

1．絵画作品について

絵画では仮象内容と物理的な平面を一体化させることによってより強い仮象性を空間に創出することを考えて制作していった。この場合、仮象内容におけるコンセプトを重視したものとなった。代表的な作品である「平面と空間」シリーズでは描かれる場と画面である平面を、写真を利用した「撮っては描く」という方法を繰り返すことで一体化させるものだった。

2．壁画作品について

絵画のコンセプトにおいて仮象内容と物理平面を融合させることを目指して制作したが、今度は物理平面の保有される空間に注目し、場と平面が既に一体となっている壁画を媒体にして仮象内容と一体化させて作品と制作した。

3．パフォーマンス作品について

平面で仮象空間を創出させてきたが、人間が場にもたらす影響力に注目し、仮想性を実現する媒体を複数の人間に変化させた。仮想性は人間の共通概念として、限定された空間に投影される形でパフォーマンスされた。また鑑賞者は、自らの仮象性を担う根拠として、仮想内容の中に当事者として参加させるべく、インタラクティブな関係を仮想体現者と鑑賞者の間に設定した。

4．絵画による半立体作品について

再び、仮想性を面の囲い込みによる物理的空間と絵画の仮象内容との一体化で創出させる作品を制作した。仮象内容と空間設定に身体の移動や、錯視を利用し、仮象空間を創出した。

第三部 総括

これらの作品は仮想性をフレームの向こう側からこちらに引きだし、より直接的に現実の空間内で体験するようにするために作られた。人間は物自体を直観できず、一人一人が独自の仮想世界の中に生きている。我々は、客観世界郁どんなものなのかはもちろん、他者の内部の仮想世界など知る由もない。そしてこれらの作品による仮想空間の創出は、ショウベンハウアーが「世界は自分の表象として存在している。」と言ったように、現実には仮想性が空間上に表出して身の回りを覆っていることの隠喩を示している。絵画などは特に、仮象がその表面を覆っていることを考えれば、このことを如実に表わしている。